

高齢者肺炎球菌ワクチン接種を受けるに当たっての説明書

1. 高齢者の肺炎球菌について

肺炎球菌感染症とは、肺炎球菌という細菌によって引き起こされる病気です。この菌は、主に気道の分泌物に含まれ、咳やくしゃみなどを通じて飛沫感染します。日本人の約5～10%の高齢者では鼻や喉の奥に菌が常在しているとされます。これらの菌が増殖し、下気道や血流中へ侵入することで、気管支炎、肺炎、敗血症などの重い合併症を起こすことがあります。

2. 高齢者肺炎球菌ワクチンについて

接種日によって使用ワクチン・自己負担額が異なりますのでご注意ください。

新しく定期接種になるワクチン(20価:プレバナー20)はより高い効果や、効果の持続性が期待されています。

接種時期	2026年3月31日まで	2026年4月1日から
使用ワクチン	23価肺炎球菌ワクチン (ニューモバックスNP)	20価肺炎球菌ワクチン (プレバナー20)
自己負担額	2,000円	3,000円
接種部位	皮下又は筋肉内	筋肉内
接種量	0.5ml	0.5ml
予防効果 持続期間	約5年	長期的 (免疫記憶効果があり、1回接種で長期にわたる効果持続が見込まれる)

(1) 23価:ニューモバックスNPについて(2026年3月31日まで使用:自己負担2,000円)

肺炎球菌の100種類以上ある血清型の中で、23種類の肺炎球菌を型別に培養し、殺菌後各々の型から抽出精製された莢膜多糖体(ポリサッカライド)を混合したものです。この23種類の血清型は、成人侵襲性肺炎球菌感染症(※)の原因の約4～5割を占めるという研究結果があります。また、対象とする血清型の成人侵襲性肺炎球菌感染症を4割程度予防する効果があります。

このワクチンの予防効果は、健康成人であれば通常5年程度は有効と考えられています。定期接種としては1回のみ接種可能であり、過去にニューモバックスNPを接種したことがある方は対象外となります。

※侵襲性感染症とは、本来は菌が存在しない血液、髄液、関節液などから菌が検出される感染症のことをいいます。

(副反応について)

よくみられる副反応には、注射部位のかゆみ、疼痛、発赤、腫脹、軽い発熱、関節痛、筋肉痛などがあり、接種日から2日後にかけて腕の疼痛などの局所反応は2～3%、筋肉痛、37.5度以上の発熱は10%以下です。多くは1～3日で消失します。ただし、過去にこのワクチンを受けたことのある人が短い期間で再接種した場合には、強い副反応が出るといわれているので、再接種する場合には、必要性を慎重に考慮して、前回接種から十分な間隔を確保して行う必要があります(5年以上間隔をおけば副反応は減少するといわれており、任意接種(全額自己負担)で再接種可能です)。

(2) 20価:プレバナー20について(2026年4月1日より使用開始:自己負担3,000円)

肺炎球菌の100種類以上ある血清型の中で、20種類の血清型を対象としたワクチンであり、この20種類の血清型は、成人侵襲性肺炎球菌感染症の原因の約5～6割を占めるという研究結果があります。また、血清型に依らない侵襲性肺炎球菌感染症全体の3～4割程度を予防する効果があるという研究結果があります。

ニューモバックスNPとプレバナー20はいずれも肺炎球菌に対するワクチンですが、ワクチンに含まれる血清型において、プレバナー20の方が高い有効性が期待でき、肺炎球菌に対して免疫記憶を成立させるメカニズムを持っているため、長期にわたる効果が見込まれています。

またプレバナー20は小児の定期接種で既に使用されており、高齢者の肺炎球菌感染症に対しても接種が推奨されているワクチンです。

(副反応について)

ワクチンを接種後に以下のような副反応がみられることがあります。また、頻度は不明ですが、ショック・アナフィラキシー、痙攣(熱性痙攣含む)、血小板減少性紫斑病がみられることがあります。

発現割合	主な副反応
30%以上	疼痛・圧痛*(59.6%)、筋肉痛(38.2%)、疲労(30.3%)
10%以上	頭痛(21.7%)、関節痛(11.6%)
1%以上	紅斑、腫脹

※ワクチンを接種した部位の症状 添付文書より厚生労働省にて作成

3. 他の予防接種との間隔について

医師が特に必要と認めた場合は、インフルエンザワクチンや新型コロナワクチン、帯状疱疹ワクチン等の他のワクチンと同時接種が可能です。また、他のワクチンとの接種間隔に制限はありません。

4. 接種に当たっての注意事項について

(1) 予防接種を受けることができない方

- ① 明らかに発熱している方(通常は37.5度を超える場合)
- ② 重い急性疾患にかかっていることが明らかな方
- ③ 予防接種の接種液の成分(又はプレベナー20の場合はジフテリアトキソイド)によってアナフィラキシーショック(通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応のこと)をおこしたことがある方
- ④ (ニューモバックスNPの場合)過去5年以内にニューモバックスNPを接種したことがある方
- ⑤ その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいといわれた方

(2) 予防接種を受けるに際し、医師とよく相談しなければならない方

- ① 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方
- ② 過去に予防接種で接種後2日以内に発熱、全身性発疹などのアレルギーを疑う症状がみられた方
- ③ 過去にけいれん(ひきつけ)をおこしたことがある方
- ④ 過去に免疫不全の診断がなされている方もしくは近親者に先天性免疫不全症の者がいる方
- ⑤ ワクチンの成分(又はプレベナー20の場合はジフテリアトキソイド)に対してアレルギーをおこすおそれのある方
- ⑥ (プレベナー20の場合)血小板減少症、凝固障害のある方、抗凝固療法を施行している方

(3) 接種を受けた後の注意事項

- ① 接種後30分間は、ショックやアナフィラキシーがおこることがありますので、医師とすぐ連絡が取れるようにしておきましょう。
- ② 接種後に高熱やけいれんなどの異常が出現した場合は、速やかに医師の診察を受けてください。
- ③ 接種後1週間は体調に注意しましょう。また、接種後、腫れが目立つときや気分が悪くなったときなどは医師にご相談してください。
- ④ 接種部位は清潔に保ちましょう。接種当日の入浴は問題ありませんが、接種部位をこすことはやめましょう。
- ⑤ 接種当日は激しい運動はさけてください。その他はいつもどおりの生活で結構です。
- ⑥ 接種後、医療機関から交付される接種済証は再接種の際必要になりますので、大切に保管してください。

(4) 副反応が起こった場合

予防接種後、まれに副反応が起こることがあります。予防接種と同時に、ほかの病気がたまたま重なって現れることもあります。予防接種を受けた後、接種した部位が痛みや熱をもってひどく腫れたり、体調変化が現れた場合は、速やかに接種した医師(医療機関)の診察を受けてください。その際は、市健康づくり課に連絡してください。

5. 予防接種による健康被害について

予防接種は、感染症を予防するために重要なものですが、健康被害(病気になったり障害が残ったりすること)が起こることがあります。極めてまれではあるものの、副反応による健康被害をなくすことはできないことから、救済制度が設けられています。制度の利用を申し込む時は、市健康づくり課へご相談ください。